

中山隧道

長岡南東部の小松倉地区にある中山隧道は、全長 877 メートルの手掘りによる日本最長トンネルです。長く危険な峠道の代替手段として、1933 年から 1949 年にかけて小松倉の住民たちにより建設されました。約 50 年間、この隧道は近隣の村へ続く安全なルートとして機能し、馬車や自動車の通行のために 2 回拡張されました。1998 年、近くに新中山トンネルが完成したため、隧道は車両通行止めとなりました。中山隧道の西側から、訪問者はルートの一部を歩くことができ、構造物を見ることができます。安全上、入り口より 70 メートル先の進入は禁止されています。

より安全なルートの必要性

小松倉には雑貨店や病院がなく、住民は医療や一部の日用品を近くの広神村と小出（いずれも現魚沼市）に頼らなければなりませんでした。2 つの村に行くための唯一の手段は、整備が行き届いていない 4km の峠道だったため、冬の大雪の期間は特に危険が伴いました。そのため、緊急の治療を受けられなかったり、道を移動中に事故に遭ったりする村人もいました。これをきっかけに、小松倉のコミュニティは峠道を迂回する方法を考案するようになりました。1932 年に隧道建設の計画を決定し、1933 年 11 月 12 日に中山隧道の工事が開始されました。

隧道の工事

建設資金は主にコミュニティからの寄付と土地やその他の資産の売却によって集められました。村人は交代制で働きながらツルハシとシャベルでトンネルを掘りました。掘削した土砂や石は木製のトロツコで搬出し、隧道の奥の方に新鮮な空気を送り込むため、ふいごが使用されました。手作業による掘削は速度が遅いことに加えて、洪水や資金調達の問題により遅れが生じ、さらに日中戦争（1937 年～1945 年）が原因で建設が 4 年間中断となりました。1949 年、東と西それぞれから掘り進めていた人たちがついにトンネル内で対面し、16 年間のプロジェクトが完了しました。

遺産

旧中山隧道は閉鎖後取り壊しが予定されていましたが、歴史的な重要性を認識し、住民が率先となって保存する取り組みを始めました。寄付金を活用し、小松倉の住民にとっての隧道の重要性和建設中に直面した課題を詳述するドキュメンタリーが制作されました。映画「掘るまいか」は 2003 年に公開され、複数の賞を獲得し、トンネルの保存に貢献しました。

日本の土木学会は中山隧道を国の土木遺産の貴重な例としています。